

## 金木犀な女

## 岩田へいきち

いつものようにコンビニの弁当を眺めていた。相変わらず、どれもぱつとしないというか食欲をそそらない。自分でも料理が出来ないではないがひとりでは作る気力が湧かない。かといって美味しいものを食べ歩くお金もないし、毎日、ファミレスへひとりで行くのは気がひけて週二回までと決めている。ここ二・三年こんな状態が続いているのだ。見慣れた弁当を遮るように若い女が前を横切った。

——どこかエミに似ている。

良くは見なかったがぼくは、直感的にそう感じた。金木犀の香りが微かにしたと思った。弁当は、どれでもよくなった。豚バラ弁当を慌てて掴むと金木犀の香りを追うようにレジへ向かった。

「温め無しで」

会計を済ませ、焦って出口近くまで来たぼくだったが、コーヒーを入れている彼女に気付いた。とっさに外へ出るのを止め、さりげないふりをして豚バラ弁当を左手に下げたまま右に反れて、ブックコーナーで適当に本を取って開いた。何の本を見ているかよく分からない。読んでいるふりをして横目で彼女のカップを持つ左手とミルクを開ける右手の指を見た。

——綺麗な指だ。

ぼくは、そう思った。ゆっくり視線を上の方へ向けたら透き通るような白い肌、面長の顔が見えた。

——綺麗だ。しかも可愛い。やっぱりエミにどことなく似ている。ぼくの好みのタイプだ。歳もエミと一緒ぐらい、二五歳ぐらいか。この世で一番はエミだとずっと思ってるがこの人なら二・五番ぐらいにしてもいいな、エミにはまだまだだけどな。

とぼくの心がやや自信なさげに呟いた。

彼女が二個目のミルクを開けようとした時、片手で開けようとしたせいか少し開いたところで彼女の指から弾け、ミルクを巻き散らしながらこちらの方へ向かって二・三回、転がった。彼女は慌てて、紙ナプキンを取って、床を拭き始めながら顔を上げてこちらを見た。予期せぬ出来事で我を忘れて凝視してしまっていたぼくは、意表を突かれ、目をそらすタイミングを逃し、バッチリ目を合わせてしまった。彼女がにっこり笑った。

——可愛い。

胸を銃で射抜かれたような気がした。

——一・五番でもいいかあ。

また自信なさげに心が眩いた。

彼女は、少し恥ずかしかったのか二個目を改めて入れ直す事はせず、カップを両手で持って飲み始めた。

——やっぱり可愛い。

本を読んでるふりに戻っていたぼくは、その時やつとその本が宗教の本であることに気付いた。文字など最初から読めるはずもないのだからまあいいかと思いつながら、ちらちらとそのまま彼女を見ていた。

——ぼくには三年前から付き合っているエミという女性がいる。コンビニに出かけては買い物袋を片手に腕を組んで二人のマンションまで帰る仲だ。いや、二人のというのは言い過ぎかもしれない。正確には彼女のマンションだ。ぼくには彼女との世界、二人の世界しかないといつも思いつながらこれまで生きてきたし、彼女もそう思っている……いや、そうに違いない。きっとそうである。

また自信のない心が眩いた。実は、ここ半年ぐらい彼女とあまり上手くいっていないのだ。しかし、ぼくの気持ちにはエミ一筋だ。これは揺るぎようがない。そんなエミに悪いなと少し思いながらまたぼくは、ちらちら横目で彼女を眺めた。彼氏も友達も周りにいる様子はなく、一人のようだ。心地良い時間が流れた。一瞬、幸せだとも感じた。

——頼むからもっとそこにいてくれ。

今度は本気で心が眩いた。

やがて、ついにコーヒーを飲み干した彼女はカップをゴミ箱に入れ、もう一度ぼくの方を見てにっこり笑って店から出て行った。その時、横目で見ていたのか、また凝視していたかはよく分からなかったが、ページはめくっていなかったようだった。ぼくは、あとを追いかけてようとも思ったが、ぼくにはエミがいるし、追いかけてどうなる？ あんな可愛い子、彼氏がいるに決つてると自信のない心がぼくを止めた。

店を出たぼくはエミのマンションへ向かいながらさっきの出来事を思い返していた。

——あんな子これまで見たことないなあ。また会いたいなあ。どこの子だろう？ 追いかければ良かったかなあ。

ぼくは、やや後悔していた。エミのマンションの前まで来て部屋の明かりも見えたが今日はなんだか彼女をまともに見れない気がすると思いつ、引き返した。

次の日、ぼくは、微かな望みを胸に同じ時間帯に昨日のコンビニのブックコーナーで

彼女が現れるのを待った。仏教とかヒンズー教とか書いてある本がまだそこにあった。

ぼくは、しょうがない、興味がなわけでもないし、少し見てみるかとページをめくって見たが入り口が気になって全然頭に入ってこない。国語のテストが出来ない子って、こんな状態なのかもしれないと思った。そんな時間が二・三〇分続いただろうか、まさかと思ったが、彼女が本当にやって来た。ドアが開いた瞬間、黄色がかかったピンクのオーラが店中に広がっていくのを感じた。今まで、他人のオーラを見たことはない。ぼくは、また横目で見るのを忘れて凝視してしまっていた。彼女は、ぼくを見て明らかに会釈をして、またにっこり笑ってカウンターへ向かった。

——ぼくのことを覚えていたのか？ 昨日、わずか一〇分程度同じ空間にいただけじゃないか。ぼくが彼女をまぶたに焼き付けるには十分な時間だが、どうしてぼくを覚えているのだろうか？ ぼくが気に入ったのか？ いや、それはあり得ない。誰でも構わず挨拶をする変な子なのか？ いや、アンフォーゲッタブル、完全記憶能力者か？

そうこう眩いているうちに、また彼女はコーヒーをカップに注ぎ始めた。そして、我にかえったぼくは、本にしがみつき、しばらく読んでいるふりをした。その時である。金木犀の香りが背後から襲って来たかと思うと、「宗教に興味があるんですか？」という女性の声が出た。

——しまった、宗教勧誘か？

一瞬心が叫んだが勧誘だろうがなんだろうが彼女が話しかけているのだ。ぼくは、既に身体がカチカチに固まり、古びたロボットのようにぎこちなく後ろを振り向いた。

「あつ、いえ、あつ」

「昨日も見ていましたよね、その本」

——やっぱり完全記憶能力者か。

ぼくは、動揺した。

「この辺に住んでいるんですか？」

——良かった、本の質問から反れた。突っ込まれたら何も返答できない。

「は、はい」

「私、越してきたばかりなんですよ」

——そうなんだ。だから今まで会わなかったんだ。

「お弁当よく買いますか？」

彼女は矢継早に質問してくる。

——もう降参だ、近くで見てもいちだと可愛い。

ぼくは、話をする決心をした。

「はい、自分で作れないこともないんだけど面倒で、もう飽きてるんですが買って帰るんですよ」

「私もコンビニのお弁当は嫌いじゃないけど直ぐに飽きてしまうんですよ。近くにファミレスないですか？」

「今日は週二回のファミレスの日だ。まさか一緒に行こうなんてことにならないよなあ。ナンパに慣れている奴ならここですかさず、「一緒に行こう」と誘うのだろうが、ぼくには、そんな話術もカッコ良さもある訳ないよな。そこは自信がある。」

ぼくは、自信が無いというところに自信があった。

「えーっと、あそこの信号のところを右に曲がって……」

「あおう、もし良かったらご一緒してくれませんか？ 一人じゃ行きにくいし」

ぼくの返事を遮って彼女が攻めてきた。

——やっぱり宗教勧誘かあ？

また自信のない心が眩いた。

「いい、いいですよ。どうせ今日は、ぼくも行く予定でしたから」

「良かったあ。私、ちょっと方向音痴であんまり遠くまで行けないですよ。特に夜はどこがどこだか」

——ファミレスの名前は言ってなかったがどこでもいいのだろうか、なんでも食べられる健康優良女子ってことか？

ぼくは、もう宗教勧誘の不安は忘れかけていた。

ぼくたちは、店を出て、ぼくの行きつけのファミレスへと向かった。ぼくの左後を離れないように彼女は歩いてくる。本当に方向音痴なのか、時々、周りを確かめるように見回しては、ぼくから遅れた分をスキップで追い掛けてくる。時折、ぼくが振り返るとニコニコして、とっても可愛い。ぶつかりそうになるぐらい、ぼくに迫ってくる。

——なんだ、これは？ 今までに経験したことない体験だぞ。夢か？ エミの時とは全然違う。何故こんなに違うんだ？ 夢ではないらしい。左後に彼女の圧倒的な可愛らしい存在感がある。

やや、自信を持ち始めた心が眩いた。

エミは、ぼくの大学の後輩である。大学時代から可愛いと思っていたが、卒業した後は、すっかり忘れていた。それが、三年前、偶然、街で出会って、エミの方から声をかけてきた。

「村田先輩、お久しぶりです。先輩、この辺に住んでるんですか？」

「は、はい、うん。君は？」

「大学の、一つ下のエミです、本川。一度、先輩に勉強教えてもらった本川です。私も近くに住んでるんですよ」

「ああ、そういえばそんなことが。彼氏は？」

エミには、大学時代、同じクラスにいつもべったりくっついていてるクラス公認の彼氏がいた。それがなんの因果か、ぼくが四年生の時、研究室に現れて、「NMRの分子構造解析の仕方を教えてください」と突然、教えを乞うて来たのである。助手の先生がぼくのことを紹介したらしかった。それはその時一回きりで、どうやって教えたかもぼくは覚えていなかったが彼女は、ぼくを覚えていてくれたらしい。

「彼氏は、今、関西で仕事してらんですよ。何年かしたらまた東京に帰って来ると思うんですけど」

それからである。エミとの交際が始まったのは。エミとの関係は徐々に進展し、今から半年前には、腕を組んで歩くほどになっていた。だが、ぼくは、しくじった。段々、現実と仮想の境目が分からなくなっていったぼくは、つい、エミに声をかけてしまったのである。

「今夜、何時ごろ帰る？ ご飯どうする？」

その時のエミの顔は今でもぼくの頭から消えない。目をまるまると見開いたまま固まっていた。

「えっ？」

驚いた後、しばらく考え込んでエミは、ぼくに向かって言った。

「先輩だったんですか？ 私には結婚を決めた人がいます。いちいち付け回さないでください」

それからというものの簡単には会えなくなったし、腕を組むこともなく、ご飯を一緒に食することも少なくなかった。と言っても以前もぼくの仮想の世界で腕を組んでいたということがあるが。

そう、ぼくは世間一般的に言うと、ストーカーなのかもしれない。エミの厳しい言葉も『婚約を解消するまで二人でいちゃいけないから今は我慢しててね』と聞こえてくるやっぱりストーカーである。このぼくが今、エミに良く似た本物の可愛い女性と歩いている。エミとの仮想の世界では無かった金木犀の香りと女性の温かさと共に。ぼくは、また現実と仮想の区別が分からなくなってきた。

——これは何か新型の香りまで出るパーチャルマシカ？

そんなことも考えたが、ともあれ、いつものファミリールレストランに着いた。

「いらつしやいませ。お客様、お二人様で良かったですか？」

誰か後からカップルが来たのかと思ったがぼくたちのことであった。ぼくは、周りを見回してから

「は、はい」と答えた。

「禁煙席、喫煙席どちらになさいますか？」

「禁煙席で」と彼女がすぐに答えた。禁煙席の奥の方に座ったぼくたちに顔馴染みというか当然ぼくの顔を知っている若い女性店員が少しニヤニヤしながら水を持って来た。

「いらつしやいませ。当店によるこそ。ご注文がお決まりになりましたらお手元のボタンでお知らせください」

「なんにする？」メニューを開きながら彼女は突然ため口になった。

——本当の恋人同士みたいだなあ。いい、いい、とってもいい、この子も一番でいいかな？

心がそう眩いた。

「私はねえ、オムライス」

ぼくは、ファミレスのメニューにも飽き始めていたが今日は、なんでもいい、彼女と一緒になのだ。とあまり考えずに

「チーズハンバーグの洋食セットでいいかな」と応えた。

「じゃ押すね」

間もなく店員がやって来た。

「チーズハンバーグの洋食セット、オムライス、あとドリンクバー二つね」ぼくが答える間もなく彼女が即答した。ぼくは終始リードされている。

「名前教えてもらってもいい？」彼女が尋ねた。

「村田、さとる」

「サトル！ サトルなんだ。私、ユマ。よろしくね」

「ユマかあ。よろしく」

何故かぼくも口調を合わせていた。

——このままこの子が彼女になってくれたらどんなにいいだろう。いやいやぼくにはエミが……妄想やん。

いつもと違うぼくの心が眩いた。

「ドリンク取りに行こうか」とユマが言って、席を立った。

——本当に付き合い始めるのか？

「うん」

ぼくらは、ドリンクバーへと向かった。

——ユマの息遣いまで聞こえそうなぐらい近い。恋人たちはいつもこんなにお互いを感じているんだ。なんて素晴らしいんだ。仮想とは明らかに違う。今までぼくは、何をしていたんだろう？

改心しかけてる心が眩いた。

ユマは、アップルティー、ぼくはコーヒーをテーブルに持ち帰った。

「仕事、何してるの？」

彼女がまた尋ねた。

「フリーターかな？ 主に大学の研究室のアルバイトをしてる」

「ふーん」

「どこから越してきたの？」

ついにぼくも質問をした。しかし、この質問がこの後のユマの思いもよらぬ話に繋がるきっかけになるとはこの時、想像も出来なかった。

「福岡、生まれもだよ」

「へえ、ぼくも佐賀だから同じようなもんじゃん」

「佐賀とは違うよ」

ユマはすかさず否定してきた。NHKのドラマでも『佐賀の出身を隠して福岡出身ということにしてみました。ごめんなさい』というくだりがあったがそんな心境なのか？ まあいい。ぼくは、そこはあえて笑って済ませた。

女性店員が料理を持って来た。またぼくを見ながら少しニヤニヤしている。ユマはアップルティーに二個目のミルクを入れ終わった。

「ご注文の品はお揃いでしょうか？ ではごゆっくりお過ごしくださいませ」

店員が去ってからユマはちゃんと「いただきます」と手を合わせてからスプーンをオムライスに入れた。一口食べてからユマが話し出した。

「私ね、逃げて来たの。ストーカーから」

——ストーカー——。

どこかで安心してしまっていた心が叫んだが動揺したことを悟られまいと声には出さなかった。

「大学のサークルの先輩に付きまとわれちゃって……」

ユマに見とれてまだ食べる体制に入っていなかったぼくは、これはヤバイと慌ててフォークを握って食べ始めた。ナイフを使うのを忘れたがどうでも良かった。

「何のサークル？」焦りながらもぼくは、精一杯の質問をした。

「演劇部。一年生の時は、けっこう面倒みてもらってたような気がするんだけどあとはあんまりサークル来てなくて、すっかりその先輩のこと忘れてたんだよね。でも私が卒業してから突然、博多駅で声をかけられて、その時は、お茶して、すぐ別れたんだけど、それから付きまとわれちゃって。全然悪い人じゃなくて優しい先輩だったんだけどね。付きまとわれた後も特に何かされるでもなく遠くから見られてるだけだったんだよね。でもやっぱりしょっちゅう見られてるとさすがにね。私の方からなるべく避けるようにしたの。そして彼氏も出来ただけどそれが原因だったのかその頃から先輩が変わってしまったの。私と彼氏が歩いてたら突然目の前に現れて彼にナイフで切りつけちゃったの。幸い彼の怪我はたいしたことなくて、示談になって先輩も直ぐ釈放されたんだけど、それからは益々ストーカー行為が酷くなって、私の会社にもばれて、気持ち悪がられちゃったりして、彼氏も結局離れて行ったから思いきって引越しちゃった。彼の親にも反対されてたみたいんだけどね」

ほくのフォークの上のご飯はユマのあまりもの話の展開にカピカピになりかけていた。「警察には相談してきたけど、住所変更手続きなんかは何もしてきてないし、友達にも行き先は言ってきてないんだ」

ほくは、カピカピのご飯を無理やりのみ込んでコンソメスープを飲んだ。ユマはマイペースでオムライスを減らしていく。

——やっぱり健康優良女子か。どうでもいいか。行き場を無くしたほくの心が動転して眩いた。

——ストーカーのほくが言うのもなんだけどその彼氏、こんな可愛い彼女を親に反対されたぐらいで諦めて根性がない。ストーカーの風上にも置けない奴だ。いや、ストーカーではない。ただの彼氏だ。先輩もナイフを使うとは、ストーカー過ぎるだろ。ほくは、絶対そうはならないぞ。ストーカーはストーカーだろ。

もう訳が分からない。ユマはまた話を続けた。

「越して来て今日で三日目なの。仕事も捜さなきゃいけないんだけど、まだ右も左も分らないし、あんまり一人で歩くのもねえ。今のところ付けてこられてる気配はないんだけどね。ナイフを一回使ってるから少し怖くて。実は、守ってくれそうな人を捜してたんだあ。ごめんね。それでこの人ならって思った人がコンビニで宗教の本を読んでいたサトルなの」

ほくが『サトル』と女性に呼ばれるのは、中学の同級生から呼ばれていた以来である。しかし、今の呼び方は、まるで恋人同士の『サトル』だ。

——よし、ユマは、ほくが絶対守る。ユマに指一本触れさせないぞ。たとえナイフで

刺されても。

やや正義に目覚め始めたぼくの心が眩いた。

——しかし、ストーカーのぼくがストーカーに追われている女子を身体を張って守るはめになるとは。これは身から出た錆？ いや自業自得と言うべきか。 いや、天罰だろ。 そうだ、天罰か。

続けてまた心がぶつぶつ眩いた。

「サトルは、ストーカーになったりしないよね？ 宗教を信じている人は他人の痛みや悲しみも分かるもんね」

——本を見ていただけである。そんなに信頼されたら重すぎる。背中に十字架を背負わせられたのか？ 正義か罰か。

ぼくは、とにかく金木犀の香りのする目の前にいるこの可愛いユマを守らなければと思った。

「電話番号とメールアドレス教えてくれる？」

ユマが透き通る目でぼくを見て懇願してきた。

——可愛い。

「ああ、いいよ。ぼくが絶対守ってやる」とぼくは言ったつもりだったが「いいよ」だけしかユマに届かなかったようである。ユマは既にすっかりオムライスを平らげていた。

一方、二口しか食べていなかったぼくは、携帯をユマに渡してハンバーグを食べ始めた。

食べ終えて連絡先も交換し合ったぼくらは店を出てユマのアパートへと向かった。食事代は、ユマが払ってくれた。ぼくは、仕事も決まっていないストーカーに追われて大変なユマに払わせるなんてとも思ったが身体を張って守るんだからいいかと流してしまった。ユマのアパートは、エミのマンションとは反対の方向だった。ぼくはどこかでほつとしていた。

——エミごめんなさい。いや、いいんだって。

やっぱり複雑である。

今度は、ぼくがユマの左後からついて行き、時折、周りを見回しては小走りで追いつき直した。ユマも時折、周りを立ち止まりながら確認している。

——方向音痴だからだけじゃなかったんだ。

うしろに回ってユマに付いてみて分かった。

「あそこだよ。二階の電気が点いている部屋」

「誰かいるの？」ぼくは、やっぱりそうだよな、恋人いるよなと思いついて訊いてみた。

「ううん、誰もいないけど、夜はいつも点けてるの。出入りを悟られにくいじゃない」  
——エミにもやられてたか？

ぼくは、いつも明かりが点いていたエミの部屋を思い出した。

「ここでもいいわ。今日はありがとう。また連絡するね。おやすみ」

——やっぱりそうだよな。今日、話を初めてしたばかりだもんなあ。『寄って行って』  
なんてならないよな。

と、どこかでほっとしている心が眩いた。

「気を付けて帰ってねえ」

——ギクツ、そうだった。襲われたのはユマでなくて彼氏の方だった。

我に返ったぼくは、エミのマンションの方まで行く勇気もなく、また意味もないと感じて自分のアパートへと向かった。気のせいかあらゆる物影に他人の、ユマのストーカーかもしれない気配を感じて、いつしか駆け足になっていた。部屋に着いた時には冬なのに汗ばんでいた。そして、あんな可愛い子とデートした記念すべき夜に半分は恐怖という十字架を背負いながら眠りについた。ぐっすり眠ってしまったのかどうかは分からないが、リアルな夢を見た。

ぼくとユマと一緒に腕を組んで歩いている。ぼくの左手には、カップラーメンが入ったコンビニの袋、何故かエミのマンションの方へ向かって歩いている。一〇メートルほど上る狭くて暗いコンクリート製の階段に差し掛かった時、階段の上の暗闇で何かキラリと光った。

——ナイフだ。

男の顔は暗くてよく見えない。

そして、その男は「ユー——マァ」と叫び声とも雄叫びとも言えない、か細い声を発しながら想像もつかないような素速さで襲ってきた。コンビニの袋が裂けてカップラーメンが二個、階段を転がり落ちた。そして男は振り返りもせず、そのまま階段を駆け下り、暗闇に消えて行った。

ぼくは左胸を手で触って手のひらを確かめた。

——良かった。血は出ていない。

「ユマ？」

ぼくは右側を振り向きユマの無事を確かめた。だが、そこにいたのは何故かエミだった。

「ふん、死ねば良かったのに」

エミはそう言い捨てる人間とはとても思えないほどの速さで階段をピョンピョンピ

ヨンと三步で掛上がり、また暗闇へと消えて行った。

——ユマがいない。

「ユマ、ユマ、ユマ」

と、そこでぼくは、目が覚めた。まだ夜中の三時半だった。今度は、冷や汗をびっしよりかいていた。それからドキドキが止まらず、朝まで眠れなかった。今日は、仕事があった。ぼくは、大学で化学実験のアルバイトをやっている。フラスコの中身を混ぜながら硫酸を少しずつ滴下していく。急激に入れると反応が一気に進み爆発してしまうので三日もかけて反応させるのだ。一滴入れては休み、また一滴入れてはまた休む。楽勝バイトである。ひと昔前ならこんなのは学生にやらせていたのだろうが今頃の学生は就活やらバイトやらで、忙しい上に責任感がない。おかげでこんなおいしいアルバイトがぼくみたいなプー太郎に回ってくるのである。朝から滴下している。妄想を膨らますにはもってこいの仕事である。ぼくは、ちゃんとした仕事について早く家庭を持ちたいと思ったこともあるが今はエミとの生活を無くしたくなくてフリーターを続けていた。エミとの生活といっても仮想だったが。

午後に入って、昨夜の寝不足のせいか少しまぶたが重くなってきた。その時、「プルルル」ぼくのガラ携が鳴った。

——ユマだ。

ぼくは、そう願いながらボタンを押してメールを開いた。やっぱりユマだった。

「ユマです。昨日はありがとう。今、何してる？ 仕事かな？ 今夜も食事一緒出来る？」

ぼくは、硫酸を一滴たらし、速攻、返信した。

「もちろん、いいよ。仕事終わったら迎えに行くよ。六時ぐらい？ 悟」

「了解。由真」

——これはやっぱり現実なのか？ これから発展して行くのか。

ワクワクしてきたぼくは、昨夜の恐怖を忘れ始めていた。とにかくあんなに可愛いのに、本物なのだ。

夕方、仕事を終えたぼくは、ユマのアパートへと向かった。そして アパートに着いて、由真へメールを出した。

「着いたけど何号室？ 悟」

「今、来るから待ってて 由真」

ぼくはユマの返信を見てから周りを見回した。忘れていたがまだまだ誰か隠れているような気がするを思い出した。

——いやいや、ユマのために死ぬるなら本望だ。あれ、エミは？

もう辺りは、すっかり暗い。春はまだまだ先なのか。

ユマがやって来た。やっぱり金木犀の香りがする。

——なんて素晴らしいんだ。今日、見ても可愛い。肌が透き通るように白い。

「どこ行く？」

今日はぼくから最初に切りだした。

「昨日と一緒でいいよ」

——今まで二日連続で行ったことはないが、二人だし、もう大丈夫。

「わかった。じゃ行こうか」

「昨日は、大丈夫だった？」

ユマがやや真剣な顔で訊いてきた。

「うん、正直ちよつと怖くなったんで走って帰った」

夢の話はユマのためにもあえてしなかった。今日もユマは周りを確認しながら歩いている。ぼくも自然と周りを気にして歩くようになった。二日続けてのデートでワクワクのはずなのに、やっぱり半分重い。キリストの顔が浮かんだ。

ぼくらは、間もなく、ファミレスに着いた。

「いらっしやいませ。こんばんは。お客様二名様で良かったですか？」

若い女性店員の顔が昨日にも増してニヤニヤしているように見えた。

——どうだ、可愛いだろう？

そこには絶対の自信があるぼくの心が眩いた。

今日は、ぼくがドリアと豆腐サラダ。ユマは和風ハンバーグをセットで頼んだ。飲み物は二人ともコーヒーにした。ミルクを二つ入れ終わるとユマが話しだした。

「あのね、私ね」

——今日もやっぱりユマペースか。

「小さい頃、すごく虫が好きだったの。カブト虫やクワガタはもちろんんだけど、カブトンやトンボ、カマカキリ、コオロギ、家の庭にいるものもたくさん捕まえては、虫籠に入れてたの。」

虫籠だけでは足りないから空き箱もたくさん使って入れてたの。それで夜も昼も眺めてたんだ。だって虫の動きってロボットみたいで面白いじゃない。それに凄く綺麗だし。親の帰りが遅かったせいかなあ？ でもね、ある日、気づいたの。その虫たちは必ず籠の中や箱の中で死ぬのね。私、潔癖症だから私から逃げた虫はいなかったわ。だから遅かれ早かれ寿命が長い短いに関係なく結局みんな死んでいくのね。餌はちゃんとやって

たわよ。『私に可愛いがられてあなたたち幸せね』って思ってたの。でも違うんだよね。食べ物に困らなくても家畜のように飼われるのは幸せじゃないのよね。きつとそうよね。食うか食われるか、食い繋げるか飢えるか、そんな虫の一生をしたいのよね。私ってなんて傲慢だったんだらうって。そしてそれからもう虫や生き物を捕まえることは一切やめたわ」

ぼくは、自分にも身に覚えがありそうなユマの話を黙って聞いていた。

女性店員が食事を持って来た。もうニヤニヤしていない。

——恋人同士だらう？

ユマは早速食べ始めると、また話を続けた。

「虫だって自由が欲しいし、恋もしたいのよね。私は子どもだったとはいえ、虫たちにとっても悪いことしたわ。サトルはどう思う？」

——どうして虫の話なんだろう。

ぼくがちょうどそう心の中で呟いている時に話を振られた。

「子どもは、残酷だからね。子どもみたいに残酷な大人もたくさんいるけど。それに気付いたんだからこれからも命を大切にしていればいいんじゃない？ ぼくもね、小さい頃からいろんなものを捕まえるのが好きで、蛙やどじょう、ふな、亀なんかを捕まえていたんだ。友達にもその技は一目置かれてたよ。でもそれを飼おうとすると、みんな死んでしまうんだよね。生き物を飼おうなんて子どもの、いや人間の傲慢なんだろうね」

「そうね」

ユマが相槌を打った。

「中学のとき、葦がいっぱい茂ってる干拓の潮溜池に自転車に乗ってひとりで行ったんだ。少し雨が降っている日だったんだけど、子鴨がいたんだよね。ぼくは、自転車を降りて捕まえようと、葦の中をそっと近付いて追い掛けたんだ。そしたらさ、目の前を飛ばない親鴨が横切ったんだ。ぼくは無意識にそっちを追い掛け始めた。でも飛ばないくせに逃げ足が速いんだ。しまいには飛び上がっちゃって、逃げられた。気付いたら子鴨もいなくなってた。凄い経験でしょ？ 『偽傷行動』と言うらしいんだけど、ぼくは、鳥がそういう身代わり作戦をすることをテレビで見えて知ってたくせに、まんまと騙されて二羽とも逃がしちゃったんだ。だって凄くりアルだったんだよ。親も必死だったんだらうね」

「ハハハ、凄～い。面白い」

ユマが笑った。そして、ぼくはまた話を続けた。

「でも、ぼくはね、あの時、親鴨がぼくを騙してくれて良かったと思ってるんだ。もし

あの時、騙されずに間違っ子て子鴨を捕まえてしまったらまた飼おうとして結局死んでしまっただらうからね」

——なんかいっばい喋っってしまった。うけたかな？

段々、調子に乗りそうなぼくの心が眩いた。

ユマは、やっぱりマイペースでハンバーグセットをほとんど食べてしまっっていた。ぼくは、豆腐サラダをつついた程度でドリアにはまだたどり着いていなかった。そして、慌てて、食べ始めたドリアは少し冷めていた。

ユマは、ごちそうさまをするとコーヒーをお代わりし、ミルクを二つ入れ、両手で持って飲み始めた。

——やっぱり綺麗な指だ。ピアニストか？ ピアニストの指も見たことないが。

ピアノを弾いているユマの後姿が浮かんた。

「コンビニに寄って帰っていい？ 明日の朝ごはん買いたいの」

ユマが言った。

ぼくらは、最初に出会ったいつものコンビニに寄っった。そしてユマは一リットルの牛乳とクロワッサンを買っった。

「サトルは、何も買わなくていいの？」

「大丈夫、帰ろうか」

「うん」

昨日より歩く二人の距離が近くなっっている。

——よし、順調だな。エミは？

一瞬、エミがよぎっった。だが、今は、エミではなく、ユマのアパートへ向かっっている。そして夢で出てきたような暗いコンクリート製の階段はここにはない。ユマは相変わらず周りを気にしながらぼくについて来る。ついにユマがぼくの左ひじを右手で掴んできつた。

——おお、腕組みまであと少し、ついに今夜は部屋にも入れてもらえるのか。エミは？

またエミがよぎっった。その時である。一〇メートルぐらい先に男が立っっている。街灯

の明かりで顔が見えた。

——ぼくに似っっている。

何故かそう感っじた。

急にユマの右腕がぼくの左脇に入って身体を寄せてきた。ぼくは、ユマの金木犀みた

いな女の香りに少しクラっとした。

——やっったあ。

しかし、クラっとしている場合ではない。キラリと光る物を手に持っている。「すいーとー」

何かを叫びながら男がぼくらの方へ向かって走りだした。ぼくは慌てて向きを変えて右手を男とユマの間に入れ、体も入れようとしたが間に合わなかった。そう、昨夜の夢の男のように動きは想像以上に素速く、あつという間に通り過ぎ、逃げ去った。コンビニの袋が裂けて、中の牛乳パックが地面に落ちた。落ちたはずみで口が開いて白い牛乳がまるで赤い血のようにトクトクと流れ出した。ぼくは我に返って、ユマを見た。ユマが倒れている。

「ユマ、つ、大丈夫か？」

——死んじゃったらどうしよう？  
不安がよぎった。

「うん、大丈夫。先輩だった。サトルは大丈夫？」

ユマが返事をした。ぼくは右脇腹を触って右手のひらを見て、

「大丈夫みたい」となんとか答えたが腰が抜けて地面に座りこんだ。体がガタガタ震えていた。

ユマがぼくに抱きついてきた。だが、ぼくの震えは全然、止まらない。

——こんなに怖いとは。夢で一回経験していたのに。

身体は正直だった。先輩は、今度は明らかにユマを狙ってきたように見えたが意外とユマは落ち着いている。

——強い、実戦二回目だからか？

ぼくは、混乱していた。

二・三〇分そこに座っていただろうか。ぼくらは、警察に電話しようとは思わなかった。そしてそこからユマのアパートまでどうやってたどり着いたのかぼくはよく覚えていない。ユマと腕を組んでいたような気もしたがそれも意識がもうろうとしてよく分からない。なんとか二人でたどり着いたユマの部屋は、二〇九号室であった。

「大丈夫？　ひとりで帰れる？」

——えーっ、「帰れ」って言うの？

恐怖で膝がガクガクになったせいかユマの色気でメロメロになっていたのか、ひとりで帰る自信がなかった。

——頼む、ぼくを中に入れてくれ、そして泊めてくれえ。

何もする自信もないくせに、ぼくの心が眩いた。

「いいわよ、中に入って」

——声には出していないはずだが、あれ？

ぼくは、言われるままに素直に中に入った。

——やったあ。怖かったけど、やったあ。憧れの女性の部屋、ユマの部屋だ。やったあ。きつと、ピンクピンクしているに違いない。

しかし、中に入ってぼくは、驚いた。

——あれえ、ピンクピンク、あま〜い香りは？

その部屋は、畳の間で物が何もなかったのだ。

——これが若い女性の部屋なのか？ いやなんかの間違いだろう。そうか、ユマはまだ越してきて四日目、今からピンクにするのか。

ぼくは、勝手に納得した。そして壁にもたれて畳の上に足をなげだして座った。

「お茶でいい？ まだ何もないんだ」

ユマは、しばらくしてお茶を持って来た。ユマもぼくから一・五メートルほど離れたところに同じように壁にもたれて畳の上に座った。そして、両手でお茶をもって飲み始めた。ぼくも真似して、両手で飲んでみた。温かさが手から伝わってなんだか落ち着いた。

「さっきはありがとう」

ユマがきり出した。

「いや、ぼくはユマを守ろうとしたけど、全然間に合わなかった。それに震えてた。ごめんね、守れなくて。自分がなさけなくて泣きたいよ」

「ううん、そんなことないわ。サトルがいなかったら私どうなったか」

「ぼくでも役にたったかな？」

「うん、助かった。さすが私が選んだ人だけあったわ」

ぼくは誉められたら不思議と恐怖心が少し消えていくのを感じ、ストーカーの男、ユマの先輩に腹が立ってきた。

——こんなに可愛い子になんてことするんだい。ぼくが絶対ユマを守ってやる。負けるもんか。

ぼくに勇気が沸いて来た。

「ぼくそろそろ帰る」

なぜかぼくは、そう言い出してしまった。

「大丈夫？」

「うん、またあいつが現れたら言うてやる。『ストーカーはやめる。ユマは、ぼくが守る』  
つてね」

——言えるかなあ？ いや、話せば分かる。同じストーリーカーじゃないか。ストーリーカーなら説得できるのか？ 理屈は通らないがぼくには、妙な自信があった。

「じゃ、また明日」

「うん、気を付けてね」

ぼくは、特に袖口を掴まれたりするでもなく、すんなり部屋から出た。

——あれ、何か忘れたような…… し、しまった。なんで帰るって言ってしまったんだろう？ もつたいない。まあいいか、明日また入れてもらおう。ぼくは、ユマのために生きる。

ぼくの頭にもうエミはよぎらなかつた。

帰り道は、何事もなく無事部屋へ着いた。ぼくはあんなに震えていたのに布団に入ったら直ぐにぐっすり朝まで眠ってしまった。

この日もまた大学の研究室のバイトだった。夕方、今日は、ぼくからメールを出した。

「今日はどこでご飯食べる？ ぼくが食材持って行くからユマの部屋でご飯でもいいよ。悟」

——また同じでいいと返事来るかなあ？ ちょっと凶々しかったかな？

昨日の恐怖はすっかり忘れてワクワクしていた。

だが、帰る頃になつてもメールの返信は来ない。

——やばい、凶々しくて嫌われたか？

ぼくは帰る前にもう一度メールを出した。

「あれ？どこ行く？ 悟」

しかし、やっぱり返事は来ない。

——もう捨てられたか？

ぼくは、さつきまでワクワクだったのに急に不安になった。

——まさかあいつがユマを。

大学を出てからぼくは電話をかけてみた。

『お客様がおかけになった電話は現在電源が入っていないか電波の届かない所にあるため……』

——つながらない。

もう一度かけてみたがやっぱりつながらない。ぼくは無意識にユマのアパートの方へ歩き出していた。辺りはもう暗くなり始めている。ユマのアパートが見えるところまで来た。ユマの部屋の明かりは点いていない。

——ユマの身に何か？ どうしよう。

ぼくは、ユマの部屋の前まで来てドアを叩いてみた。  
コン、コン、コン。

——反応がない、どうしよう？ 昨日、なんでぼくはユマをひとり置いて帰ってしまったんだろう。

ぼくは後悔したかももう遅い。ノブを回してみたが回らない。鍵がかかっている。

「ユマ、ユマ」

呼んでみたが返事がない。

——警察？ 通報すべきか？ いや、待てよ、なんて説明すればいい？ 『彼女の名前は？』

「ユマ」「名字は？」「……」「君と彼女との関係は？」「……」てなことになって、『エミさんとの関係は？』なんて質問まで。考えてみたら名字を知らない。何故、聞いてないんだ。こんな大事な時に名字も知らないなんて。恋人同士じゃなかったのか？

ぼくの中ではユマと付き合っただけで何ヶ月もたつたように感じていたが良く考えると付き合い合ったのは、たった二日、出会って四日目である。

ぼくが警察への連絡を躊躇したその時、隣の二一〇号室のドアが開いた。

「今日、引越されましたよ」

——え、っ、そんな。

ぼくは、叫びそうになった。

「どこに行ったか分かりませんか？」

「入居の挨拶の時と今日、二回喋っただけだからね。そこまでは聞いてません。綺麗な人だったですね。」

中年の女性が答えた。

——それは自信ある。ここで威張っても意味がない。ユマがいない。

「怪我したり、変な様子はありませんでしたか？」

「そうですね、特には。普通でしたよ」

——良かった。ユマは生きていて、怪我もしてない。とりあえず警察はいらないか。

ぼくは、それを聞いていったん引き下がることにした。

「ありがとうございました」

——でもどうすればいいんだろう？ もうここには帰って来ないし、ユマは、ぼくの部屋も知らない。ぼくは捨てられたのか？ いや、昨日、あいつに見つかっちゃったからとりあえず移っただけで落ち着いたら連絡が来るのでは？ そうだ、そうだ、そうに違いない。

すっかり自信をなくしたぼくの心に自分で言い聞かせた。

ユマのアパートからの帰り道、ぼくはもう一度メールを出した。

「大丈夫？ 心配しています。すぐにメールか電話ください。悟」  
電話もかけてみた。

『電源が入ってないか電波の……』

——やっぱり夢だったのか？ あんなに可愛いユマが本物なわけないよな。ぼくの彼女になるわけがないよなあ。でもエミの場合とは全然違ってたよな。

その夜、ぼくは眠れなかった。ユマを初めて見た時からのことをずっと思い返していた。この四日間の出来事は、ここ二・三年よりもはるかに濃い気がした。もうエミのこととはどうでもよかった。

——ユマにもう一度会いたい。いや、会わなければユマが遠くへ行ってしまう。

——どんどんそんな気がしてきた。

——博多だ。とりあえず博多へ行こう。明日はバイトを休んで博多へ行こう。

ぼくは、そう決めたらいつの間にか眠ったらしく朝になっていた。早速、大学に電話し、休みをもらった。二・三日になることも考えて着替えもカバンに詰めた。泊まるところは実家の佐賀でいい。佐賀から博多までは一時間もかからない。あてはないが、きっと福岡の実家にユマは帰っていると思った。ぼくは、電車で東京駅へ向かった。

東京駅に着いた時である。ぼくの携帯のメールが鳴った。

——頼む、ユマであってくれ。

——恐る恐る携帯を開いた。

——ユマだ、やったあ。

嬉しさとほっとした反動でぼくはその場にしゃがみこんで携帯にしがみついた。

『悟、ごめんなさい。急に消えちゃって。心配したでしょ？ 私は大丈夫よ。どうしてる。大丈夫？ 今頃、私がいなくて泣いているんじゃないでしょうね？ 私のことを少し好きになってたでしょ？ 私ね、実は女優なの。悟が私に惚れるのは当然よ。だって悟が私に惚れるような演技をしてたんだもん。そう、私は人に頼まれて演技してたの。それが私の仕事なの。理解出来る？ 私たちを物影から見ていた人たちは、スタッフで、私を守ってくれたの。襲ってきた先輩も俳優さんよ。ごめんね、騙して、怖がらせて。でもね、悟のこと嫌いじゃないよ。私のこと必死に身体を張って守ろうとしてくれたし、嬉しかったわ。それにね、子鴨、親鴨の話、面白かったわ。悟、子鴨を捕まえな

くて良かったと言った。とっても優しい心の持ち主ね。普通ね、ターゲット（今回は悟ね）を私の部屋に入れたりはしないのよ。でもあなたは大丈夫と確信してたわ。私はもうあなたの前から消えていなくなるけど、悟なら大丈夫よ。きっと本当の相手が見つかるはずよ。もっと周りをよく見てごらんさい。悟のことを気にしている女の子がいるはずよ。だって悟、けっこういいけてるもん。私もタイプよ（演技じゃなくて！）。エミさんは悟の本当の相手じゃないわ。もう解き放してあげて。悟も気付いているはずよ』

——えーっ？

ぼくの心がホントに声を出した気がした。

そして、びっくりした拍子に尻餅をついた。

「ヘエヘエヘエ」「ハハハッ」

ぼくは、もう笑うしかなかった。その場でゴロゴロころげ回りたい気分だった。

——やっぱり夢だったのか。ユマの仮想の世界に引きずり込まれてたんだ。

ぼくは、メールの続きを読んだ。

『私はもうユマを離れるからユマのことは忘れて。捜しても無駄よ。福岡出身じゃないわ。あれは脚本通り喋っただけ。悟は、悟の本物の世界を見付けて。きっと幸せになっ  
てね。さようなら』

ぼくは、ショックに打ちひしがれながらも、どこかすっきりした気持ちで自分の部屋へたどり着き、大きくため息をついた。そして電話をかけてみた。

『お客様がおかけになった電話は現在使われてません……』

——ユマ、分かったよ、ありがとう。

希望と自信をもらった心が眩いた。

ぼくは、その後、就職サイトにエントリーし、福岡で仕事を見つけた。そして、やがて結婚し、家庭を持った。福岡じゃないと言われていたけどぼくの中のユマは福岡出身で、また、ぼくが迷った時、助けに来てくれそうな気がする。ぼくは、今でもコンビニでコーヒーを飲んでいる若い女性を見かけるとユマと金木犀の香りを思い出し、『大丈夫だよ、ユマ、奥さんと仲良くやっているよ』と心の中で眩いている。